

『新風』事件始末

——高見順の時代——

奥 出 健

要 旨 『新風』は昭和十五年六月十三日付で創刊された雑誌である。しかしこの雑誌は発刊したその日に廃刊勧告をうけるといふ異常なとり扱いを内務省から受けた。いわゆる『新風』事件である。

本稿はこの雑誌の創刊準備段階から廃刊させられるまでの顛末をたどり、同時にそのことによって、この雑誌創刊の中心的存在であった高見順の文壇革新の野望と情熱をみようとする。

中島健蔵の『現代作家論』の中に、△高見順の時代▽という造語があった。昭和十二・三年を中心にした高見の華々しい文壇活動を形容しての言葉である。ここに紹介する『新風事件』は、所謂この△高見順の時代▽を象徴するできごとであると共に、その時代の一応の終焉を意味する事件でもあった。この事件のあらましを詳しく探ることにより、我々は太平洋戦争直前の文化統制のきびしさの実体、つまりは権力の権化である軍部のありようとそれを背景にした官僚の手練のすさまじさと、そういう状況化にあってなお文壇勢力の塗りかえを企図した高見順の野望をはっきりみとることができるだろう。

この事件については、高見順自身が『昭和文学盛衰史』の中でかなり詳しく書いているので、まずはその記述に添って、そのなりゆきをここに記してみる。

昭和十四年の春頃、高見ら『日曆』旧同人の間で『日曆』を再刊しようという話を持ち上った。その話を同誌の旧発行先である春陽堂に持ち込むと、いったんは快諾したが、そのうち、どうせ雑誌を出すのなら同人に新進作家を網羅した派手なものを出したいと注文をつけてきた。しかしそれでは『日曆』の再刊という主旨とは根本的に事情を異にすることなので、その話は頓挫した。ところがその年の初夏、高見が丹羽文雄、石川達三らと一緒に天竜下りをした際、高見が丹羽らに春陽堂が新進作家グループによる新雑誌を出す意向があることを話すと、「やろうか」ということになり、それで、その話を高見は『日曆』旧同人と春陽堂とに伝えた。この話に春陽堂は乗り気の意向を示したので、その旨今度は丹羽と石川に知らせ、その上で「新雑誌の発起人」の一人に北原武夫を加えることを提案した。『新雑誌の方は幸い、とんとん拍子に話が進んだ。『新風』という誌名もきまり、春陽堂ビルに大きな広告看板が掲げられ」るようになり、「三十代作家の総結集ということで三十余人の同人勧誘の呼びかけをした。そしていいよい具体的な編集にかかろうとしたとき、春陽堂から」、「社が経済的に行きづまって雑誌を出す能力がない」といってき

た。『新風』発刊は結局暗礁に乗りあげた。しかし、まもなく、当時北原武夫の妻だった宇野千代の口ききで「急に『新風』が中央公論から出してもらえることになり」、昭和十五年六月に創刊号が出た（以上十九章）。しかし、『新風』は一号きりで廃刊となった。「紙の統制で廃刊を余儀なくされたのである」。『新風』は当局側から「手習草紙」の一種と目されたのであろう」（以上二十章）

と以上のように高見は記している。ここには『新風』創刊準備段階から廃刊までの事実のおおむねが記されている。しかしそれはあくまで事実のおおむねであって、創刊の際のことでは、おそらくきわめて意識的に書き除かれたであろう事柄があるし、廃刊のことに關しては、重大な当時の時局に対する見落しがある。前者でいえば、『昭和文学盛衰史』では『日曆』再刊の話から急に『新風』という名の新雑誌が身代り登場したように記されているが、それは事実ではないので、『新風』が登場するまでには、かなりの紆余曲折があった。当時の文壇状況を追いながらまず前者の問題から明らかにしていこう。

高見が『日曆』再刊を春陽堂に打診した時、春陽堂が暫くして出してきた条件、つまり新進作家の網羅した雑誌にしたいという要求は文壇状況に目ざとい出版社にすれば当然の申し出だった。『日曆』発刊時は『世紀』と並ぶ有力同人誌であったとはいえ、高見順、新田潤、矢田津世子、渋川驍達だけでは当時商業ベースにのせることは難しかったのだらう。その数ヶ月前には寄合世帯とはいえ、文壇の大御所的存在であった『文学界』に対抗する勢力と目される『文学者』⁽¹⁾が創刊（昭14・1）されていて、文壇状況は小同人雑誌群雄割拠の時代から変わりつつあった。その『文学者』⁽¹⁾同人には『文学界』の中堅売れっ子作家・島木健作、阿部知二に匹敵する丹羽文雄、石川達三⁽²⁾がいた。そのようなメンバーを擁した『文学者』や『文学界』と比較すると、単なる『日曆』同人のみによる雑誌というのはいかにも小ぶりにすぎたのである。しかしこのように誰が見ても駒不足の党派の再編成を、この時期に高見がなぜ企図した

のか。『昭和文学盛衰史』にも記されているように、『文学者』同人結成時、実は高見もその有力メンバーの一人として誘いを受けていたのである。彼はしかしその同人入りを断っている。一方で徒党を組むことを拒否しながら、その数ヶ月後には自らが中心となって『日曆』という徒党を組もうとする、この反背した行動を解くには、高見独特の幾分ひねこびれた面をも含有する反骨精神を考える他ない。もっとも、この反骨精神は、この事柄に限り裏を返せば、自分が盟主のグループが必要だったと理解することもできる。なぜなら、高見が『文学者』同人入りを拒否した実質的背景として『文学者』同人の主体が『新潮』系の作家、評論家によって占められていたということがあげられる。『新潮』系でない高見が入っても所詮は外様である。この頃の高見の胸の裡には、すでに自分は文壇の中で、ある程度の位置をつかんだという自負とそれに支えられた覇氣とが横溢していたのではあるまいか。それが大きな党派の中で郎党の一人にはなりたくないという氣持を強くさせていたと考えられる。だが、高見が、文壇の中堅に駆け登ったという自負は、必ずしも自惚れではなかったのである。昭和十二年一月『描写のうしろに寝ておられない』（信正社）が話題を呼び、同年十二月には『流木』（竹村書房）を上梓、また昭和十四年一月からは『文芸』に「如何なる星の下に」を連載、好評を博すなど、高見の自信を裏づける状況は整っていた。しかし彼の文壇的位置をさらに明確にさせたのは、やはり改造社の次の企画であったろう。かつて改造社は円本として有名な『現代日本文学全集』という明治・大正作家の全集を刊行し、出版界に冠たる実績を誇っていたが、昭和十四年には、この全集の続きものと銘うって昭和期の氣鋭作家の作品を収める『新日本文学全集』全二十七巻を企画している。そしてここに、横光利一、川端康成、阿部知二、島木健作、丹羽文雄、石川達三、石坂洋次郎らと並んで高見も一人一巻をふりあてられている。また、配本順位まで事前に各作家に告げられたかどうか不明だが、第一回配本（昭15・1）が二十六巻の火野葦平から始まって、高見は二十一巻で中位の第十三回という配本順になっている。この改造社の全集企画が高見の作

家としての自信作りに及ぼした影響は少なくなかったと思う。だから、春陽堂の条件提示によって、自分が実質的盟主となって運営していく筈だった『日曆』再刊の話がつぶれた時、高見はおそらくある種の挫折感を抱かずにはいられなかっただろう。が、それはしかし深いものではなかった。むしろそのことによって高見の野望は高まり、『文学界』の対抗勢力と目されていた『文学者』を有名無実の骨抜き勢力にしてしまうような新たな対『文学界』勢力を春陽堂の話に乗ることによって作り出そうと考えたのである。『昭和文学盛衰史』によれば『日曆』再刊話が昭和十四年「春」、春陽堂の新提案に乗ることにして丹羽文雄らに声をかけたのが同年「初夏」というのだから、『日曆』再刊の企画から新雑誌創刊への乗りかえがいかに早かったか、ということがわかる。これは高見の新勢力編成への執念の強さを窺わせる。

さて、春陽堂の提案に乗じて新雑誌を作るという高見の呼びかけに応じたのが、前述のように、丹羽、石川、そしてこの頃からようやく新進の作家として頭角をあらわしはじめていた北原武夫であった。そこで決定されたことは、右の四人が共同編集者となり、同人制をとらず、三十代作家を中心とした雑誌を作ることだった。同人制をとらなかったのは、おそらく春陽堂の提案であるうが、それはこの新雑誌名を、かつて春陽堂が発行していた著名雑誌名『新小説』とするためであった。作家側もこの出版社側の提案を快諾したらしく、不満らしいものは外部に一切でていない。彼らはむしろ過去の栄光ある雑誌名を引きつぐことによって、『文学界』のような『文芸春秋』系、及び『新潮』系と拮抗できる第三の勢力となることを積極的に選んだのである。そして春陽堂との申し合せて創刊号の實質的出版を昭和十四年の暮とすることまで話が進んでいた。ここに意気揚揚たる共同編集者の『新小説』出版準備中のアップル文がある。『東京日日新聞』昭和十四年九月十七日付の石川達三の文章である。

『新小説』の以前の出版者であった春陽堂の希望と、われわれの希望が一致して雑誌を再刊することになった。

春陽堂で見れば再刊といふのが至当であるが、新小説が活躍してゐた時代をまるで知らないし、またそのころの文学の形式を踏襲するといふ主張をもつ訳でもないから私の気持としては創刊といふべきものである。横光氏や川端氏をもつて代表されてゐる一ゼネレーションの次に、現在卅代の作家たちがゐるわけであるが、今度の新小説は主としてこの新時代の人たちの仕事を明確に示して見たいといふ意図をもつてゐる。——中略——いま、卅代作家を中心にした雑誌を作ることはおのづから一時代の文学を明瞭にすることになるだらうと思ふ。さし当つて意識的に何かの色彩をとらうとはしないが、しかも前時代とは異なる新文学の性格を築くことが出来はしないかと考へるのである。——中略——日本文学自体の問題として、大陸文学、生産文学、などの究明、記録文学とか農民文学とかに結論づける事、私小説、客観小説、説話体小説等の研究整理。かう揃べてくるとひどく事務的に聞えるが、要するに、もしわれわれの時代の新しい文学といふものが真の新しさをもつものならば『新小説』の刊行はその成長と大成とに重要な役割を果し得るのではないかと期待されるのである。——中略——同時代の作家評論家の良き発表機関とする予定であり、相当の稿料を以て酬いる事になつてゐる。——中略——目下、発行部数〇万部として黒字になるといふ案をしきりに計算している。〔第二次『新小説』〕

この石川達三の文章を読めば、『新小説』創刊は『文学界』の中心的存在横光、川端に次ぐ世代を自認する新進作家達の新文壇結成宣言であつたことがわかる。柳の下⁽²⁾の二匹目のドジョウを狙つた出版社と、高見を中心として既成文壇に不満をもち、意気盛んな三十代作家の利益が見事に一致したのである。従つて、『昭和文学盛衰史』に記されてあるように確かに話は「トントン拍子」に進んだ。そしてこの石川の文章が発表される頃までは順調に発刊準備が進み、「世上に『新小説』復活は鳴物入りで喧伝され⁽³⁾」ていたという。これが『昭和文学盛衰史』で記すところの「春陽堂ビルに大きな広告看板が掲げられ」云々という部分と一致するのであろう。高見はその中でその看板は『新風』

のためのものだったというが、それは明らかな間違いである。春陽堂が出そうとしたのは『新小説』であり、『新風』という雑誌名はその時期（昭和十四年十月頃）にはまだ影も形もなかったのである。しかし、石川達三のアップール文が出て数十日しかたない内に早くも『新小説』再刊話に暗雲がたれこめてきた。『日本学芸新聞』昭和十四年十一月二十五日号に『「新小説」陣潰滅の由来記』が載っているところを見ると、同年の十一月初旬～中旬には春陽堂の資金ぐりの都合で、この企画は破綻をきたしていたことになる。高見は『昭和文学盛衰史』で『新風』（もちろんこれは『新小説』の誤り）が春陽堂から出なくなつて「せっかくの意気ごみもこんなことで暗礁に乗りあげた。私は丹羽文雄たちに合わす顔がなかった。」と記している。高見が丹羽達に合わす顔がないと思つたのは故あることで、先の石川達三の文章にも「丹羽君と私とは大して編集的才能もなさそうだが、高見、北原君が新鮮な知能を総動員して計画を立ててくれるので、予定どほりのものが出来さうに思ふ」とあるように、この企画は四人の共同編集と銘打っていたものの、実質的には高見と北原がヘゲモニーを握っていたのである。

ところで、『新小説』再刊企画が十一月中に立ち消えになつてから、どの程度の時間的経過があつて『新風』創刊構想が出てきたのだろうか。昭和十五年三月一日発行の『文学界』三月号の林房雄「内輪話」には「高見順に（引用者注・同人に）入つてもらほうと思つたら彼は中央公論社から出る（といふ）新雑誌の同人だからと断」わつたという記述があるから、十五年の二月中には新雑誌の発行所は中央公論社と決つていたことになる。『新小説』再刊挫折から、わずか三ヶ月程度の間に発行所、及び新雑誌の実質的編集長（井上友一郎）を決め、しかも、目の敵にしていたが故に逆に憧憬的でもあつたであろう『文学界』同人入りの折角の誘いを断つた高見に、挫折する毎に激しくなつていく彼の文壇革新の気魄と野望とを見ることが出来る。しかし昭和十四、五年になると文化統制は次第にきつくなり始めていた。すでに国家総動員法第二十条によって文化統制の大枠が決つていたが、さらに雑誌類に対す

る統制は用紙不足という名目によって激しさがまし、雑誌の創刊はもとより既成のものでも刊行そのものが難かしくなっていた。高崎隆治『戦時下の雑誌その光と影』（風媒社）によれば「戦争直前において総計二万五千誌をかぞえたものが、昭和十四年度末には八千六百誌という、当初の約三分の一の数に減少」させられていたという。さらに昭和十五年には紙誌統制のきわめつきである新聞用紙統制委員会が内閣に設置されることになる。それを『朝日新聞大阪』（昭和15・5・18）は次のように伝えている。「用紙配給統制は従来企画院が裁定に当つてゐたが、新聞雑誌界の實際事情にそぐはぬ憾みがあり——中略——あらたに内閣に新聞紙統制委員会を設置するに決し、十七日定例閣議で——中略——決定をみた。——中略——なお同委員会の事務は内閣情報部が掌る」。このような状況下にあつて高見らの新雑誌の創刊は難行を続けた。その様子は『日本学芸新聞』の「文壇時事解説」（昭和15・4・10）に、「採みに採んだる雑誌『新風』は紙不足によりクォーター——説抬頭、最近また雑誌説に転向——」と記されてあるところからも察せられる。

昭和十五年の五月に入るとようやく『新風』発刊の準備が相整ったのか、『新風』についての文章があいつぎ發表されている。五月一、二日付『東京日日新聞』に新田潤、五月四、六、七日付『国民新聞』に南川潤、そして五月八日付『早稲田大学新聞』に井上友一郎が、それぞれアピール文を書いている。その中、南川潤の『「新風」の誕生』は次のように記している。

今度の「新風」は、先に噂のまま立ち消えになつた「新小説」の生れ変りで、それよりもつと拡大強化されたものである。——中略——今度の「新風」は——中略——一躍三十三人に増加した同人の全体會議に編輯の重点を置き、そこで論議された編集プランを實際的技術的に具体化する担当者として井上友一郎一人が当ることとなつた。——中略——正直にいつて事実「新風」には——中略——確呼とした中心的主張、理論の提示出来るやうなものは未だ何もない。いつてみれば、これからこのグループの中に自然と生れ来つて何等かの形をなすのを待つといった形にあ

る。——中略——この時代文学の進歩のために、何らかのことをなさうとする気持では一致してゐる。文壇現状打破の気分は等しくしてゐる。

右の引用文にもあるように『新風』が第一に『新小説』と変わっているところは同人制をとっていることである。三十三人の同人については、雑誌解説では最も詳しい『現代日本文芸総覧中巻』（明治文献）の『新風』の項目にも明らかにされていないので資料としてここに提示しておく。この同人名簿は先の新田潤の文章と、南川潤の『国民新聞』の「文学に於ける主義——『新風』の創刊号にふれて」に記されている。

荒木魏、青柳優、石川達三、石光葆、伊藤整、井上友一郎、小田嶽夫、長見義三、北原武夫、小山祐士、渋川曉、高見順、太宰治、田畑修一郎、田宮虎彦、田村泰次郎、張赫宙、寺崎浩、十返一、豊田三郎、十和田操、中村地平、新田潤、丹羽文雄、平野謙、福田清人、古屋綱武、牧野善三、丸岡明、南川潤、宮内寒弥、森本忠、矢崎弾、以上である。この同人一覧を見れば、丹羽文雄、石川達三に混って『文学者』同人の伊藤整らも加わっており、これによって『文学界』の対抗雑誌とみられていた『文学者』のその役割は『新風』がほぼ肩代りした格好になっている。

第二に、このグループは、先の南川潤の文章にもあったとおり、「文壇現状打破」を一つの大きな目標としてゐることである。それは編集責任者・井上友一郎の文章で「出来れば、今日の文壇を少しばかり掃除したいといふのである。古いものと新しいものが、もうそろそろ入れ代りしようと思う」（『新風』の意義）『早稲田大学新聞』昭15・5・8）と表現されているところと呼応している。

さて、『新風』の編集方針については先の南川の記事とおりであるが、もう少し詳しく井上友一郎が記しているので重複部分もあるがこれも紹介しておく。

三十三人のメンバーが毎月一回会議を持つて、各自の意見を能ふ限り開陳する。——中略——そして更に小委員会を

開いて全体会議の内容に具体的な検討を施すわけだ。これを纏めるのが私の役だ。あとの事務的な色々な仕事は、中央公論社側に於て、然るべき専門の記者が實際的に処理してくれる。（『新風』の意義「前掲」）

この様子では、『新風』の種を蒔いた高見の存在が淡く見えるが、高見としては、このメンバーを纏めるためにも黒子に徹する必要があったのだろう。が、とにかく高見順の一声から、ある世代の作家が大同してこれ程強力なグループを作ったというのは文壇史上稀なことであった。やがて『新風』は昭和十五年六月十三日付で発行される。『新風』創刊号の内容の概略や目次は『昭和文学盛衰史』、『現代日本文芸総覧』に記されてあるので、それにゆずるが、石川達三の筆になるという、創刊宣言に匹敵する扉の言葉だけは重要な部分のみ再録する。

同人は思想的にもばらばらで、各自が自分の道に於て努力して行かうといふ方針である。だから寄合世帯であるとか乗合船であるとか世評はいろいろ有るらしいが、吾々はこれで宜いのだと思つてゐる。吾々に共通なもの、若さである。

三十代の作家が混乱してゐるとか沈滞してゐるとか言はれてゐるが、「新風」はさうした論評に対しての返答を用意してゐる。混乱や沈滞が事実であるにしても、一時的なものであることを承知してもらひたい。やがて、時代の影響やジャアナリズムの要求や、さうした種々な混濁を越えて新しい文学の道は発見されるものと信じてゐる。

このような主旨をもって『新風』は発刊された。発行所は新風社、発売所が中央公論社となっている。その創刊号には三十三人の同人中、二十六名が執筆参加するという賑やかさであった。

創刊されると、それに対し様々な論評がでたが、その中で創刊前後を通じて多かったものは「文壇ギルド化の強力

な現⁽⁵⁾れ」というものだった。従って同人達も、文壇旧勢力に対してはともかく、新進作家で『新風』の同人に誘わなかった作家たちに対してはなるべく刺激しないような心くばりをした気配がある。先の扉の言葉にもその様子が見えるし、中村地平なども、「新しい雑誌を『文学者』や『文学界』と対立して考へてゐる取汰沙があるらしいが、それはどういふ意味に於てもナンセンス以上ではない」と、クギをさしている。しかし、新グループ編成の中心人物高見順にとっては、『新風』は外からの論評どおり「文壇ギルド化」をはっきり意識して作ったものだったとみるべきである。昭和十二年に早くも高見は『文学界』グループ批判の「強者連盟の毒害」(『報知新聞』昭12・3・24)を書いているし、その心意気は一貫して失われていなかった筈である。なぜなら単に徒党を組んだり、時局便乗の文学批判をするだけなら盟主とはならないまでも『文学者』同人に入れば用は足りた筈であり、わざわざ他グループの中心的人人を引き抜いてまで自己中心の同人雑誌を作る必要などなかったからである。

ともあれ『新小説』再刊構想時では出版屋と組んで売らんかなの思惑が見え見えであったのに対し、この『新風』ではかかげる主張はそれに比べれば表面上ははるかに高くなっている。詳細かつ正確に記述してある『昭和文学盛衰史』の『新風』の項に『新小説』の記述がすっぱり抜け落ちているのは、おそらく高見の中に、この商売気の横溢した野心を恥かしむ気持があったためであろう。

さて、話を元に戻そう。『新風』が出ると最も早く反応を示したのは新聞文芸欄で、『東京日日新聞』昭和十五年六月二十一日付「第八感」と、『東京朝日新聞』六月二十二日付「槍騎兵」が『新風』創刊号について書いている。前者が岡田三郎、後者は竹賢人のペンネームで発表されているが、いずれも期待の割には内容に不満というものであった。しかし、それもいたしかたのないことで、新しい同人誌ができたとして、すぐさま新しい文学形態が生れると思うこと自体が性急すぎるのである。ところが、このような外からの論評が出切るはるか前に『新風』は既に廃刊勧告を

当局から受けていたのである。しかも創刊号が誕生した文字通りその日に。このことについて井上友一郎は『「新風」事件と我等』(『国民新聞』昭15・6・24)で次のように記している。

創刊号が現れると、早速内務省から責任者に呼出しがあつた。――中略――向こう(引用者注・当局側)の意向といふものも懇談的に詳しく訊いた。それに依ると、どうも『「新風」』といふ雑誌が緊迫した最近の時局に副つてゐないこと風俗的に(と云ふことは結局、思想的に)あまり感心できないこと、出版法に依る雑誌にしては少々行き過ぎの記事があること、等々という理由である。――中略――『「新風」』に抛つてゐる同人たちは、現行の多くの新聞雑誌に年ちう自由に寄稿してゐる。その内容と、今度『「新風」』に書いたものに私は大した違ひはないと思ふ。

しかし一つの色彩といふものも、多く集まれば強さが違ふし殊によると別な輝きさへ加へかねない。それが当局を刺戟したと云へば云へるのだらう。――中略――しかし、当局は雑誌の廃刊を勧告しても、私たち卅何人の友情の廃棄までは勧告して居られぬやうだ。せめては、これが不幸中の幸である。

皮肉まじりの無念さが、右引用文にはよく出てゐる。特に井上友一郎の場合、この『「新風」』の編集に大きな期待を抱き、わざわざ都新聞を辞してまでの打ち込みようだったから、その落胆も大きかったのである。しかし、高見、丹羽、石川ら『新風』の中心同人は落胆もさることながら、この事件はもっと違った意味で胸にずしりこたえるものがあった筈である。それは不気味な軍部の影であり、その影の中で妖怪の如く動く内務官僚の姿をかいま見てしまったことである。

普通、刊行物は発売に先だつて納本することになっていたが、納本後一週間から十日程しても当局側から音沙汰のない時は無事故であるといわれていた。もし当局側の忌諱にふれると納本後早くて二、三日後に発行人又は編集責任者が喚び出されるということになっていた(以上、畑中敏雄『覚書昭和出版弾圧小史』(図書新聞社刊)。とすれば、即日喚

び出しというのはまさしく異常としかいいようがないのである。当局側は『新風』発刊を手ぐすね引いて待っていたとしか考えられない。しかも『新風』発刊に当って、高見らは当局側と相当綿密な打ち合せを行っていた。井上友一郎はその様子を前掲の『早稲田大学新聞』紙上で次のように記している。

私は丹羽、石川、高見、伊藤などの諸君と一緒に、内務省や警視庁の検閲課の人々を幾度となく訪れた。逢って色々話し込むと、当局の意のあるところは十二分に諒解された。むしろ同情いたしたい程の苦心も分った。それなら私たちもその方針を尊重して、止むなく出版法に依ることにしようといふ事になったものである。

周知のことであるが、月刊の文芸雑誌類は当然新聞紙法によらなければならなかった。新聞紙法による必要のない雑誌は学術、技芸、統計など特殊の、いわゆる研究色の濃厚な雑誌に限られていた。しかし用紙統制が強力に押し進められている最中故、昭和十五年頃では新聞紙法による雑誌創刊は極度におさえられていた。作家側の内務省訪問は、このかしくも叫ばれている紙統制の中で、どうにか新聞紙法による発刊、つまりは純粹の文芸創作雑誌の発刊を目こぼしてもらうためのお百度参りだった。それでも新聞紙法による許可は出なかったが、先の井上の文章にあるように、とにかく出版法という話になった。その時作家たちは、当局側が名目上出版法で出版するが内容は創作商業雑誌であってもかまわないというふうに、一種の暗黙の了解をしたと考えていたのではあるまいか。だから彼らも当局側の姿勢の柔らかさに呼応・協力するかのようになら「わざわざ不自由らしい隔月発行といふやうな形式さへ取った」（井上友一郎前掲『早稲田大学新聞』）のである。しかしこれは権力というものに對してあまりにも甘い考えであったことを後で彼らは思い知らされたのである。当局側の事前の不気味な姿勢の柔らかさを石川達三も座談会で次のように証言している。

尾崎一（雄）・薄つべらの同人雑誌で新しく出たのがありますね。事前さういふこと（引用者注・頁数や発行部数

をさす）を注意するといふ手はなかつたのですか。／石川（達三）・こつちは全然聴いて居ない。内務省にも警視庁にも立代り入代り足を運んで居るが、その時はさういふ話はない。（『歴史』座談会「『文学者』」昭15・8）

今からみれば当局側の手の内はよく見える。事前には甘い姿勢を見せておき、実物ができて有無いわせぬ証拠物件が揃ったところで一挙に首を締めあげようというのである。そのむき出しになった当局側の手の内は、昭和十五年六月二十五日付『日本学芸新聞』に載った「『新風』廃刊理由を内務当局に訊く」という高圧的声明文で明らかである。

新風は——中略——新聞紙法による認可が許可されなかつたので、隔月発行といふ、つまり単行本の形式で出したものである。で内務省では出版法（第二条）によつて停止を命じた訳で、新聞紙法によるも出版法によるも、戦時体制下にある内務省の統制方針は同一であるといふことを知つていたゞきたい。——中略——新風は同人組織の形になつてゐるが、あれでは同人雑誌には見江ないと思ふ。中央公論社を背景とした商業雑誌である。同人雑誌といふものに対しては、内務省では無名の同人が集つて各自その研究を発表し同人間に配布するものと解釈してゐる。この程度なら、かつ発行部数も極めて僅少であるから、つまり研究発表機関といふ狭い範囲内で内務省でも許可してゐる。ところが新風を見ると内容的にも同人の集まりには違いなからうが研究誌としての見解は下せない。

ここでは、当局に協力のつもりで示した隔月発刊が逆手にとられて、単行本扱いされている点が注目される。高見は『昭和文学盛衰史』で、所詮『新風』は当局側から「手習草紙」としか見られなかつたのだらうと自棄と皮肉をこめて記しているが、むしろ真正正銘の「手習草紙」ならば廃刊勧告されることはなかつたのである。なぜなら、内務省声明にもあるようにそれらは文芸研究誌として出版法で認可されていたからである。しかし、『新風』が同人の文芸研究誌か否かということよりも実質的に内務省が一番こだわったのは、その声明の中にはしくも指摘されているよ

うに、作家側の背景、つまりは経済的後楯である中央公論社の存在であった。結局、『新風』側は、創刊号のみ発売することを許してもらうことになるのだが、それはともかく、当時、中央公論社の存在が『新風』廃続刊の最も重要なポイントであったことを、『昭和文学盛衰史』執筆時の高見は識らなかつたらしい。賢明にも『現代日本文芸総覧中巻』は『新風』解題の項目に、『新風』は、「軍部の圧力が発行所の中央公論社に加えられ、創刊号一号だけで廃刊された」と記し「廃刊の理由は藤田圭雄氏に確かめた」と但し書きしている。発行所を中央公論社と記しているのは明らかにミスだが、他の部分は解題の通りである。前掲『覚書昭和出版弾圧小史』によれば、昭和六年頃から軍部の『中央公論』に対する反感が増大し、昭和十四年頃には軍部からの相当強圧的な介入が中央公論社に及んでいる。軍部はこの頃、中央公論社の嶋中社長を非協力的自由主義者と見なし「社長嶋中雄作の思想傾向や個人的性格をもはや自己に帰一させることが不可能」と判断、「社の内部に直接圧力をかけることによって、一気に社長更迭にまでもっていく」動きを示していたという。このように軍部にきびしく目をつけられた中央公論社に経済的援助を求めることは、火の中に油を注ぐようなものであった。

高見順の文壇革新の野望もこのようにして軍部・内務官僚の前に費えさつたのである。もちろんこの事件は単に高見の野望挫折だけに止まらなかつた。この事件をいみせしめの材料に当局側は次々に諸雑誌を廃刊、もしくは統合していったのである。『新風』事件直後に起つた、ぐろりあそさえての『文明評論』の廃刊も当然『新風』事件が前提となつた。

注

- (1) 紅野敏郎「昭和十年代文学に関する一考察(中)」「文学者」をめぐって」「文学」昭47・6を参照されたい。
- (2) 河上徹太郎は「本年の文壇の回想」(『東京朝日新聞』昭14・12・10)で「島木健作とか阿部知二とか石川達三とか丹羽文

雄とかいふ名だと間違ひなく売れる。」と評している。また、深田久弥も「創作概観」(『文芸年鑑昭和十五年度』昭15・12)で「八月。連載長篇阿部知二氏『風雲』(日本評論)、石川達三氏『知慧の青草』(新潮)終る。この二篇直ちに単行本として巷に出、売行飛ぶ如し。——中略——この一、二年の中堅作家の著作の売行良きこと未曾有のことなり。中で著書を出すや否や易々と五十版を起す作家(本屋の広告を信ずるとして)は下記の如し。即ち、石川達三、阿部知二、島木健作、林芙美子、石坂洋次郎、横光利一の諸氏。」と記している。

(3) 「『新小説』の崩壊の後日譚」『日本学芸新聞』昭15・1・10

(4) 昭和十二年三月の「強者連盟の害毒」(『報知新聞』)と題した『文学界』グループ批判は有名である。

(5) 『新風』創刊号の「新風」と題するコラム欄の中で紹介されている。